身はここに首は野原にさらすとも
思い果たさずおくものか。

この日、このさまを見んものと、近郷近在より大勢集ったが、後手にしばられた千左ェ門に対したしおき人の持つ刀に逆手の水がかけられ、やおら首落さんと刀が振上げられた瞬間、目をおおって正視できなかったという。千左ェ門の無念骨髄に徹してか、切り落とされた首が地にころがりながら二口三口物をいうように口を動かしたという。

その首はただちにさらし首の刑として、首洗いの池にて洗われ、台に乗せられ、見張り番つきで首さらし場でさらされたという。ここに松の木があったが、戦時中、応召献木として、数人の勤労奉仕者によって伐り倒された。その太枝切りの際、鋸がピンとはねとび探せとも見つからなかったという。根は松根油をとるため掘おこされ、その場に放置されてあったが、いつの間にか姿を消したという。

後日がたり袋田の庄屋の屋敷頽れたりという。

（話者　桑名四郎）

水利論争

《矢田野》

嘉永元年の大干魃による、矢田野、掘込の水争いの顛末は、小林家に代々伝えられ、その当時のようすを詳しく記述した古文書も発見されて、言伝えは事実であったことが判明した。